はしがき

旧日本軍は、現在の日本国内および国外に関する地図類を多数作製し、軍事目的に使用するとともに、この多くを民間の利用に供してきたことはよく知られている。第2次世界大戦の終結後、こうした旧軍の地図作製事業は、基本的に国土交通省(建設省)国土地理院や海上保安庁海洋情報部（水路部）にひきつがれた。ただし、「外邦図」とよばれる、現在の日本の領域外の地図は、これらの機関の業務の対象外におかれ、その存在もごく一部の人々に知られているだけである。敗戦とともに、旧植民地や占領地域、さらには占領予定地域に関する地図作製の意義がうしなわれただけでなく、それぞれの地域が主権をもった国家に属し、それまで作製されてきた地図についても同様に役割が終了したからと考えられる。近年、しばしば指摘されるような地図の政治性、ひいては国家との結びつきは、第2次世界大戦終結後の外邦図をめぐるこうした変化に典型的にあらわれているともいえよう。

このように、すでにその本来の役割をうしなった外邦図に焦点をあて、科学研究費(基盤研究A、研究課題「『外邦図』の基礎的研究：その集成および地域環境資料としての評価をめざして」)をえて共同研究を開始した背景には、いくつかの事情がある。地図史あるいは地図作製史の観点からすれば、外邦図は『測量・地図百年史』(1970年刊)や『日本水路史』(1971年刊)にふれられているとはいえ、まだ多くの研究課題をのこしている。とくに国家や「帝国」と地図作製との関係が注目されている今日(そのひとつの例として、Edney, M.H., *Mapping an Empire: The Geographical Construction of British India, 1765-1843*,1997刊があることはよく知られている)、旧日本軍による外邦図作製が、そうした局面で、どのような特色をもっているかが学術研究の焦点となりつつあるわけである。

こうした歴史的関心にくわえ、地域環境資料として外邦図を再評価するうごきもみられる。作製されてからすでに50数年以上の年月が経過し、その記録する景観や環境が、地域の長期的な変動をモニターするに際して、きわめて重要な意義をもつと考えられるようになっている。外邦図がとくに変動のはげしい東アジア・東南アジア地域を対象としている点は、その価値をさらに高めているといえよう。今後はGISをもちいたその体系的利用が、国内だけでなく海外においても活発になると予想される。これによって、地球環境問題の解明に貢献することも可能であろう。

本研究は、こうした外邦図に対する複数の視角を共有しつつ、まず書誌学的な観点から検討を開始する必要性を、多くの研究者がみとめるにいたったところで構想された。外邦図は、上記のように、第2次世界大戦終結以後の日本の地図作製機関においては業務の対象とされてこなかった。このためその全容を示す目録さえ公開されるにいたっていない。また地図そのものも、内外のさまざまな機関に収蔵されていること

があきらかであるが、所在目録の作製や公開も不充分な状態である。内外の研究者、とくに日本とアジア地域の研究者が、外邦図を素材として活発な研究を進めるためには、まずその所在や資料価値をあきらかにすることが要請されているわけである。

この場合、とくに強調しておかねばならないのは、一定の規格にもとづいた近代地図といえども、そこには作製の意図や過程がさまざまに反映しているという点である。とくに『地図をつくる：陸軍測量隊秘話』(岡田喜雄編，1978 年刊)にあらわれた手記をみると、地図の各図幅の背後には、さまざまな事情があったことが推測される。そうした点からすれば、外邦図も他の古地図を利用する場合と同様に、まずその作製に関する基礎的な検討が不可欠である。なかには、多彩な情報を集成して作製された図も多く、それらについては個々の情報源の検討も必要となる。

こうした作業の展開にむけて、本年度はまず、研究参加者の情報交換、内外の各機関に所蔵されている外邦図の概要の把握、すでに開始されている目録作成作業の継続など多彩な作業がおこなわれた。これらの作業は今後も継続されるが、その内容や成果の概要を冊子として刊行することを企画するのは、まだ初期の段階であるが、本研究の経過やえられた知見を、研究参加者だけでなく、それ以外の方々にもひろく共有していただく必要性が大きいと判断したことによる。

本研究の推進は、現職の大学教員で構成される、科学研究費の研究組織だけでは困難なことは、当初よりあきらかであった。浅井辰郎先生をはじめ、外邦図の整理・保存や研究に従事してこられた方々のご協力が不可欠である。こうした方々は、他にもおられると考えられ、共同研究をオープンにし、関心の輪をひろげていくことは、今後の本研究の進行にとって重要な意義をもつと判断された。

また、外邦図の所蔵機関は多岐にわたり、本研究に参加されない場合でも、理解と協力をお願いしたい場合がすくなくない。本研究の関心、進行、成果について関係機関にひろくお知らせしておくことは、そうした場合にそなえるとともに、外邦図に対する関心をさらにひろげるためにも有用と考えられたわけである。

本来ならばこの冊子は、外邦図が対象とした地域の研究者の利用も考え、外国語の要旨なども添付すべきであるが、まだ研究がはじまったばかりの段階でもあり、今後の研究の輪のひろがりとともに、これは考えることとしたい。

本冊子は今後も続編を刊行する予定である。これらが外邦図に関心をもつ方々の情報交換の場になることを期待したい。

2003 年 2 月

小林　茂

(研究代表者)